

エレアのゼノン

— その《多》の否定の論証 — (I の 2)

山 川 偉 也*

V 《多》(πολλὰ) の本性

A

さて、いましがたわれわれは、《多》の否定の論証において、ゼノンが「 $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ は $\pi\acute{\alpha}\nu\tau\eta \acute{o}\mu\iota\omicron\nu$ である」という前提にしか依拠していないことを確認した(この事実にかかわって、わたしは、Stephen Makin, “Zeno on Plurality”, *Phronesis*, vol. xxvii, no.3-1982 に多くを教えられた。ここに注記しておく)。このことが意味するところは、いわゆる「物体の無限分割可能性」が、ゼノンの第一義的前提ではなかったということである。ゼノンは、「 $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ は、それが $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ であるかぎりにおいて、分割可能である。そこで……」といったふうには議論を進めない。彼はむしろ、「 $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ がもし分割可能であるとすれば、そのときには、それは無限に分割可能である。そして……」というふうに議論を進める。これがゼノンのやり方だったことを客観的に確証するため、シムプリキオスを離れて別の史料を検討する。

1. テミスティオス断片 12.1 は次のように言う、「ゼノンは有るもの($\tau\acute{o} \acute{o}\nu$) が連続($\sigmaυνεχές$)・不可分($\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\acute{\iota}\rho\epsilon\tau\omicron\nu$) であることから(に基づいて [$\acute{\epsilon}\kappa$]), それが — ($\acute{\epsilon}\nu$) であることを論証しようとしたが、それは次のように言うことによってである。すなわち、もしそれが分割されるとすれば($\acute{\epsilon}\acute{\iota} \delta\iota\alpha\iota\rho\epsilon\acute{\iota}\tau\alpha\iota$), 物体的なものは無限に分割されることのゆえに($\delta\iota\grave{\alpha} \tau\eta\nu \acute{\epsilon}\pi' \acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu \tau\omicron\mu\eta\nu \tau\acute{\omega}\nu \sigma\omega\mu-$

* 本学文学部

キーワード: ①エレアのゼノン, ②《多》の否定, ③連続体

④《多》の否定と《運動》否定の関連, ⑤ゼノンの論敵

α τ ω ν), それは確かな意味では (βεβαίως) — ではないことになるだろう, と」。すなわちテμισティオスは, はっきりと, ゼノンの「無限分割」の概念が “ τὸ ὅν ” の分割可能性の仮定に基づくものであることを指摘しているのである。

2. テμισティオスのこの発言に関する注釈のなかで, シンプリキオスも次のように言っている。「ところでテμισティオスもゼノンの議論が, 有るもの (τὸ ὄν) が— (ἐν) であることを, それが連続しており (συνεχὲς) 不可分 (ἀδιαίρετον) であることから (に基づいて [ἐκ]) 論証するものであるとして次のように言っている。“何故ならばもしそれが, と彼 [ゼノン] は言う, 分割されうとするならば, 物体の無限分割のゆえに, 厳密な意味では一ではないことになるであろう”, (Simplicius, 139. 19) と確認している。この点については次に掲げるフィロポノスの文章の主旨も同じことである。しかしフィロポノスはそれに加えて, ゼノンの議論に現れる《多》の本性にかかわる重要な発言をしている。少し長いが原文を掲げ, 全訳する。

3. Philoponus, 80. 23

Ζήνων δὲ ὁ τούτου μαθητὴς συνηγορῶν τῷ διδασκάλῳ κατεσκεύαζεν ὅτι καὶ ἐν τῷ ὄν καὶ ἀκίνητον ἐξ ἀνάγκης, ταῦτα δὲ κατεσκεύαζεν ἐκ τῆς ἐπ’ ἄπειρον τῶν συνεχῶν διχοτομίας, εἰ γὰρ μὴ ἐν εἴη τὸ ὄν καὶ ἀδιαίρετον, ἀλλὰ διαιροῖτο εἰς πλείονα, οὐδὲν ἔσται κυρίως ἐν (εἰ γὰρ διαιροῖτο τὸ συνεχές, ἐπ’ ἄπειρον ἂν εἴη διαιρετόν), εἰ δὲ μηδὲν ἔστι κυρίως ἐν, οὐδὲ πολλά, εἴ γε τὰ πολλά ἐκ πολλῶν ἐνάδων συγκεῖται. ἀδύνατον ἄρα εἰς πολλά διαιρεῖσθαι τὸ ὄν· μόνως ἄρα ἐν ἔστιν. ἢ οὕτως· εἰ μὴ τὸ ἐν εἴη, φησί, καὶ ἀδιαίρετον, οὐδὲ πολλά ἔσται· τὰ γὰρ πολλά ἐκ πολλῶν ἐνάδων. ἐκάστη οὖν ἐνὰς ἥτοι μία ἐστὶ καὶ ἀδιαίρετος, ἢ καὶ αὕτη εἰς πολλά διαιρεῖται. εἰ μὲν οὖν μία ἐστὶ καὶ ἀδιαίρετος ἐκάστη μονάς, ἐξ ἀτόμων μεγεθῶν τὸ πᾶν ἔσται, εἰ δὲ καὶ αὗται διαιροῦνται, πάλιν περὶ ἐκάστης τῶν διαιρουμένων μονάδων πευσόμεθα ταῦτά· καὶ τοῦτο ἐπ’ ἄπειρον. ὥστε ἀπειράκις ἄπειρον ἔσται τὸ πᾶν, εἰ πολλά εἴη τὰ ὄντα. εἰ δὲ τοῦτο ἀτοπον, μόνως ἄρα ἐν τὸ ὄν, καὶ πολλά εἶναι τὰ ὄντα οὐχ οἷόν τε· ἐκάστην γὰρ μονάδα ἀπειράκις τεμεῖν ἀνάγκη, ὅπερ ἀτοπον.

彼の弟子ゼノンは、師を擁護して、有るものが必然的に一であり不動であることを論証したが、その論証を彼は、連続体の無限分割に基づいて行なった。というのも、もしも有るものが、一でも不可分でもありえず、多くのものへと分割されうるとするならば、それは決して厳密な意味では一ではないだろうからである（一何故ならば、もしも連続体が分割されるならば、それは限りなく分割されうることになるであろうから一）。しかし、もし何物も厳密な意味では一でないとするれば、いやしくも《多》が多くの一から成るものであるなら、いかなる《多》もまたありえないこととなる。したがって、有るものが《多》へと分割されることは不可能である。それゆえ、それはただ一でのみありうるのである。この議論はまた次のようにも進められる。もしも一にして不可分なものがあらぬとすれば、と彼は言う、いかなる《多》も存在しないであろう、と。というのも、《多》は多くの一から成るものだからである。ところで、一のそれぞれは一つで不可分であるか、それとも、それ自体が《多》へと分割されるかである。したがって、もしもそれぞれの単位が一にして不可分であるならば、全体は〔複数の〕不可分の大きさから成ることになるであろうし、もしもしかしそれら自体も分割されるとなれば、それら分割される《単位》のそれぞれ一つずつについて、再びわれわれは同じことを説き聞かされることとなろう。かくしてこれは無限に至る。その結果、全体は無限の無限倍となるだろう、もしも存在するものどもが多であるとするならば。しかし、もしこのことが背理だとすれば、有るものはただ一でのみあって、存在するものどもは多でありえないこととなる。というのは、その場合には、それぞれの単位の無限回にわたる分割が必然となるが、これはまさに背理だからである。

すなわちフィロポノスもまた、ゼノンが、「もしも有るものが、一でも不可分でもありえず多くのものへと分割されうるとするならば ($\epsilon\acute{\iota}\ \gamma\acute{\alpha}\rho\ \mu\eta\ \epsilon\nu\ \tau\acute{o}\ \acute{o}\nu\ \kappa\alpha\acute{\iota}\ \acute{\alpha}\delta\iota\alpha\acute{\iota}\rho\epsilon\tau\omicron\nu,\ \acute{\alpha}\lambda\lambda\acute{\alpha}\ \delta\iota\alpha\iota\rho\omicron\iota\tau\omicron\ \epsilon\acute{\iota}\varsigma$

πλείονα) という仮定の下に「無限分割」に基づく《多》の否定の論証を行なったと証言しているのである。ゼノンの「無限分割」による論は、それゆえ確かに、ゼノン自身にとっては反事実的であった仮定「τὸ ὅν は分割可能である」に基づくものだったのである。ところで、上のフィロポノスの発言には、シムプリキオスやテミスティオスにはなかった新たな事柄への言及が見出される。すなわち「連続体の無限分割」(ἐκ τῆς ἐπ' ἀπειρον τῶν συνεχῶν διχοτομίας) がそれだ。それだけではない。彼はさらに、ゼノンが論証しようとしたのは「有るもの(τὸ ὅν) が一であり不動(ἀκίνητον) であること」だったと言っている。この発言は、ゼノンの《多》の否定論が、《運動》否定論に密接に関連するものであったことを示唆している点で、きわめて重要である。フィロポノスの発言の重要性はしかし、それだけにとどまらない。彼は《多》についての、[おそらくはゼノンの時代に溯るであろう]定義らしいものさえ与えているのである。彼は、《多》(πολλά) を、「多くの一から成る [もの]」(ἐκ πολλῶν ἐν ἑαδων συγκεῖται) と呼んでいるのである。ところでフィロポノスは、自分がそこで「一」(ἐν ἑαδων) と呼んだものをすぐ後のところでは、「単位」(μονάδων) という言葉で言い換えている、《多》の定義[らしいもの]は、「多くの単位から成る [もの]」(ἐκ πολλῶν μονάδων συγκεῖται) であったとしても、いっこうに差し支えなかったとでもいうふうには。

さて、「無限」・「連続」・「不動」・「一」・「単位」・「数」。これらの概念が指し示す領域は、明らかに、ギリシア最古の幾何学的数論のそれである。しかもそれは、ピュタゴラス学派の人々が開拓したそれである。アリストテレスは、「数」(ὁ ἀριθμός) を「一」(τὸ ἓν) から成るものと定義したのが最古のピュタゴラスの徒たちであったと証言している(τὸν δ' ἀριθμὸν ἐκ τοῦ ἐνός, *Met.*, A. 5, 986a20)。ピュタゴラスの徒にとって「数」は、「一によって測られる多(=集まり)」(πληθὺς ἐν ἑμετρητόν) であった(*Met.*, 1057a3)。ところでこの「数」についての

定義は、ヤムブリコスによってタレスに帰せられた数の定義：「単位の集成」(μονάδων σύστημα) や、そして当然、ユークリッド『原論』第7巻定義2における数の定義：「数とは、単位の集成から成る多である」(Ἄριθμός δὲ τὸ ἐκ μονάδων συγκεείμενον πλῆθος) をもただちに想起させるものである。

さて、このようにフィロポノスの発言は、わたしたちをギリシア最古の数論の領域での考察へと誘うものではあるが、まず初めに、ゼノンの《多》の否定論との関連においてその領域に立ち入ることがどの程度まで正当化なされるかを、他の史料に基づいて見届けておいたほうがよいであろう。

B

まず、『形而上学』第3巻4章(1001b7-13)におけるゼノンの議論についてのアリストテレスの証言から始める。

1. Met. B. 4.1001b7-13

ἔτι εἰ ἀδιαίρετον αὐτὸ τὸ ἓν, κατὰ μὲν τὸ Ζήνωνος ἀξίωμα οὐθὲν ἂν εἴη. ὁ γὰρ μήτε προστιθέμενον μήτε ἀφαιρούμενον ποιεῖ μείζον μηδὲ ἔλαττον, οὐ φησιν εἶναι τοῦτο τῶν ὄντων, ὡς δηλονότι ὄντος μεγέθους τοῦ ὄντος. καὶ εἰ μέγεθος, σωματικόν. τοῦτο γὰρ πάντῃ ὄν. τὰ δὲ ἄλλα πῶς μὲν προστιθέμενα ποιήσῃ μείζον, πῶς δ' οὐθὲν, οἷον ἐπίπεδον καὶ γραμμὴ. στιγμὴ δὲ καὶ μονὰς οὐδαμῶς.

さらに、一そのものが不可分だとすると、ゼノンの要請によると、どこにもないということになるだろう。何故ならば、付け加えられても減ぜられても、ものをより大きくもより小さくもしないところのもの、そのものが存在するということを、彼は、存在するものは大きさをもつこと明らかであるという理由により、否定するからである。そして、もし大きさがあるなら、それは物的である。それは全次元において存在するから。だが他のものども、たとえば平面や線は、ある加え方をすると加えられたものを大きくするが、別の仕方ではそうしない。が、点や単位は、決してそうしないだろう。

アリストテレスは、ゼノンが論駁しようとした「一」(έν)の「不可分」(ἀδιαίρετον)性が、「点」(στιγμή)ないし「単位」(μονάς)のそれであったと証言しているわけである。しかも、その場合の「点」や「単位」には、明らかに、「大きさ」も「部分」もないことを前提してそう言っている。というのもアリストテレスは、これに続く文章において、「大きさ」(μέγεθος)を持たないはずの「点」や「単位」から、いかにして「大きさ」(μέγεθος)が生ずるに至るのかを問題にしているからである(1001b170-18)。

この議論との関連において、シンプリキオスは、エウデモスのゼノン論に関してアレクサンドロスが言ったことを次のように引用する。

2. Simplicius, 99. 7 以下

“ὥς γὰρ ἱστορεῖ, φησὶν, Εὐδημος, Ζήνων ὁ Παρμενίδου γνώριμος ἐπειράτο δεικνύναι, ὅτι μὴ οἶόν τε τὰ ὄντα πολλὰ εἶναι τῷ μηδὲν εἶναι ἐν τοῖς οὖσιν ἓν, τὰ δὲ πολλὰ πλῆθος εἶναι ἐνάδων.”

エウデモスが報告するところによると、パルメニデスの仲間ゼノンは、有るものどものうちに一はありえず、《多》とは一どもの集まり(τὰ δὲ πολλὰ πλῆθος εἶναι ἐνάδων)であるゆえに、《多》は存在しえないということを証明しようとした。

「《多》は一どもの集まり」(τὰ δὲ πολλὰ πλῆθος εἶναι ἐνάδων)というこの表現こそ、先にフィロポノスのゼノンに関する証言に出てきた《多》の定義[らしきもの]にほかならなかった。

ところで、シンプリキオスは、次のようにも言っている。

3. Simplicius, 97. 13

καὶ Ζήνωνά φασι λέγειν, εἴ τις αὐτῷ τὸ ἐν ἀποδοίη τί ποτέ ἐστι, ἔξειν τὰ ὄντα λέγειν. ἡπόρει δὲ ὥς ἔοικε διὰ τὸ τῶν μὲν αἰσθητῶν ἕκαστον κατηγορικῶς τε πολλὰ λέγεσθαι καὶ μερισμῷ, τὴν δὲ στιγμήν μηδὲ ἐν¹ τιθέναι· ὁ γὰρ μήτε προστιθέμενον αὖξει μήτε ἀφαιρούμενον μειοῖ, οὐκ ᾔετο τῶν ὄντων εἶναι.

そして彼らはゼノンが、もし誰かが彼に一の本性が何であることを説明するなら、存在するものども（＝《多》）について語りえただろう、と言っている。で、思うに、彼は、感覚しうるものどもの各自は、範疇のうえでも分割のうえでも、《多》であると語られるのに対し、《点》はけっして一なるものとして措定されえないからというので、われわれにアポリアを提起したのであった。というのも、付け加えられても増大させず、除去されても減少させないものを、彼は存在するものだとは考えなかったからである。

このシムプリキオスの発言の主旨は、先に引用したアリストテレスの発言におけるそれと合致するものであるが、アリストテレスよりいっそう明確に、ゼノンが攻撃した「一」の本性が、ほかならぬ「点」（στίγμη）であったことを指摘している。

ゼノンの《多》の否定の論証の核心、そしてゼノンの論敵について

A

このへんで、ゼノンの《多》の否定の論証の核心がどこにあったか、また、その論証によって彼が否定しようとした理論はいかなるものであったか、そして、その理論を主唱した者が誰であったかという問題に決着を付けることにしたい。

わたしたちは先に（上のC）、ゼノンの論敵の主張なるものを定式化した。その定式化は、その後に検討した諸史料に基づく追加項目を補足するなら、次のように改訂されうる。

1. “τὸ ὅν” は、いたるところが一樣（πάντη ὁμοιον）である。
 - (1) “τὸ ὅν” がいたるところ一樣（ὁμοιον）であるとは、それが連続体としてある（συνεχές）ということである。
2. “τὸ ὅν” は、一樣に分割可能（διαίρετόν）である。
 - (1) “τὸ ὅν” が分割されるならば、それは多くの部分に分かれ、《多》（πολλά）を形成する。“τὸ ὅν” の全体は、ひとつの《多》である。

- (2) 《多》とは、構成単位としての《一》（ἐνᾶς）どもの集まり（πληθος）である。
- (3) “τὸ ὅν” 全体は、それ以上は分割不可能（ἀδιαίρετον）な諸存在（τὸ ὄντα），すなわち最小（ἐλάχιστα）にして無限数（ἄπειρα）の究極的な諸要素，それらのそれぞれが《一》（ἐνᾶς）であるところの，究極的な諸要素（ἑσχατα）へと分割可能である。
- (4) それらの《一》のそれぞれは，自体としては不可分（ἄτομα）であるが，ひとつの《一》と別の《一》とを分けることはできる。すなわち，ある不可分な《一》（α）と別の不可分な《一》（β）を分割することはできる。換言すれば，“α”と“β”を明確に識別することが可能である。すなわち，“α”である《一》は“β”である《一》であらぬし，“β”である《一》は“α”である《一》であらぬ。
- (5) それぞれの《一》は，部分をもたない（ἀμερές）。
- (6) しかし，それぞれの《一》は，それらが一（ἓν）であるという点では，相互に，寸分の違いもない。

さて，ここで，一つの思考実験をやってみよう。つまりゼノンの論敵のこのような主張に含まれている“τὸ ὅν”に例えば「直線」を置き換え，「究極的な要素」や《一》に，アリストテレスやシンプリキオスの報告にあった《点》（σημεῖον）を置き換えてみるのだ。すると，以下のような諸命題が得られる〔上の〔2〕以下の適用〕。

1. 直線は，一様に分割可能である。
2. 直線が分割されるならば，それは多くの部分に分かれ，《多》を形成する。直線の全体は，ひとつの《多》である。
3. この場合の《多》とは，直線を構成する単位としての《点》どもの集まりにほかならない。
4. 直線全体は，それ以上は分割不可能な諸存在，すなわち最小にして無限数の究極的な諸要素，それらのそれぞれが《一》であるところの

《点》へと分割可能である。

5. それらの点のそれぞれは、自体としては不可分であるが、ひとつの点と別の点とを分けることはできる。すなわち、ひとつの点 P_1 と別の点 P_1 を分割することはできる。換言すれば、 P_1 と P_2 を明確に識別することが可能である。すなわち、 P_1 は P_2 であらぬし、 P_2 は P_1 であらぬ。
6. それぞれの点は部分をもたない。
7. それぞれの点は、それらが点であるということでは、相互に寸分の違いもない。

見られるとおりこれらの諸命題は、一種特異な「点存在論」とでも言うべき一つの小理論体系の存在を示唆しているが、シムプリキオスが伝えるところのゼノンの《多》の否定論の主目的は、この「点存在論」を自己矛盾に導くことに置かれたと思われる。

では、この点存在論の主唱者は誰であったか。それをわたしは、第二世代ピュタゴラス学派の数学者たちに比定する。ここに「第二世代」ということを言うのは、わたしがピュタゴラス学派とエレア学派との間の世代にわたる理論的確執を想定し、その確執が、論争のレベルという観点からして少なくとも二世代にわたるものであった、と考えられるからである。その場合、第一段階の確執は、わたしの考えによれば、第一世代ピュタゴラス学派のコスモロジーに対するパルメニデスによる根底的批判によって生じたものである。そして、そのパルメニデスの攻撃のなかには、ピュタゴラス学派の数理哲学の基本的前提に関わる批判が含まれていた。

B

ピュタゴラス学派の数学研究がピュタゴラス自身に始まるものであることについては、アリストテレスの弟子の一人アリストクセノス（前4世紀）、がその算術に関する論文（Stob. Ecl. 1 prooem. 6 (fr. 81 F. H. G. II 289; DK. 58B2)) のなかで、

ピュタゴラスはあらゆる事柄のなかで数に関する研究を最も尊重し、それを商取引の用から引き離し（ἀπαγαγῶν ἀπὸ τῆς τῶν ἐμπορῶν χρείας）、あらゆるものを数になぞらえる（ἀπεικάζων τοῖς ἀριθμοῖς）ことによって、これを一步先へと進めたのだった。というのも数は、他のものどもを包含し、そしてあらゆる数の間には相互に比の関係が成り立つ（λόγος ἐστὶ πάντων τῶν ἀριθμῶν πρὸς ἀλλήλοισι）からである。

と言っている。そして、その数学研究がピュタゴラス学派のなかでどのように継承されていったかについては、『形而上学』におけるピュタゴラス学派の教説への有名な言及（第1巻第5章 985b23-986a21）のなかでアリストテレスが、

さて、これらの人々〔レウキッポスやデモクリトス〕と同時代に、そしてこれらの人々よりも以前に、ピュタゴラスの徒と呼ばれている人々が、数学研究に最初に着手し、この研究を前進させたが、彼らは数学のなかで育ったので、それら数学的なものの諸原理をあらゆるものの原理だと考えたのだった。というのは、それらのうちにあって数こそは、その本性において第一のものであって、彼らには、これら数のうちにこそ、「火」や「土」や「水」におけるよりも、存在するものや生成するものどもに類似した多くの点が認められると思われたのだった。つまりは、数のこれこれの属性が正義であり、これこれは靈魂また理性であり、しかるに他のものは好機でありというふうに、他のものどもの一つ一つについても、同様にいわば数的に表現しうると思われたのである。そしてさらに彼らはまた、音階の属性や割合（比）が数で表されるのを認めたのだった。で、他のすべてのものは、そのまったき本性において、数の模倣として成っている（ἀφωμοιωσθαι）が、他方、数は、全自然のなかで第一のものだと思われたので、彼らは、数の要素を全存在事物の要素だと認め、天界

全体をも音階であり数であると考えたのである。……ところで、彼らも、数を原理（ἀρχή）だとし、諸々の存在事物の質料としての原理だと考えるとともに、その属性や状態を形成する原理だとも考えている。彼らによると、数の要素は偶と奇であり、後者は限られたもの（πεπερασμένον）で前者は無限なもの（τὸ ἄπειρον）である。一はこれら両者から成る（τὸ δ' ἐν ἑξ ἀμφοτέρων εἶναι τούτων）。(というのも、一は偶かつ奇であるから [καὶ γὰρ ἄρτιον εἶναι καὶ περιττόν])。しかるに数は一から成り、そして天界全体も、先に述べられたように、数である。

のように報告している。この報告でまず注目しておきたいのは、「これらの人々〔レウキッポスやデモクリトス〕と同時代に、そしてこれらの人々よりも以前に」という言葉で、アリストテレスが、「ピュタゴラスの徒と呼ばれている人々」に世代間の区分を設けている事実である。すなわち彼は、(1)レウキッポス・デモクリトスの世代に属するピュタゴラスの徒と、(2)彼ら以前の世代に属するピュタゴラスの徒を区別したうえで、ピュタゴラス学派の人々の考えを概括しているのである。

さてしかし、上の陳述においてアリストテレスは、何を伝えようとしているのであろうか。ピュタゴラス学派全般に当てはまる「原型的思考」のようなものを指摘しているのであろうか、それとも、ある世代のピュタゴラス学派の人々を特に考慮してその学説を解説しているのであろうか。この問題は決定的な仕方では答えられないものであるが、上の叙述においてアリストテレスが、歴史的事実の細部にはこだわりなく、ピュタゴラス学派の思考形態の特質を一般的な仕方では指摘しようとしていることは確かだと思われる。その特質は次のように要約されうるであろう。

1. 数がアルケーである。

- (1) 数学的なものの諸原理があらゆるものの原理である。(985b25-26)

- (2) 数こそはその本性において第一のものである。(985b26-29)
- (3) 数が全自然のなかで第一のものである。(986a1-3)
- (4) 数が原理 ($\acute{\alpha}\rho\chi\eta$) である。(986a15-17)
- (5) 「火」や「土」や「水」よりも、数のほうにこそ、存在するものや生成するものに類似した多くの点が認められる。(985b26-29)
- (6) 数は存在事物の質料原理であるとともに、形相原理でもある。(986a15-17)

※「諸々の存在事物の質料としての原理だと考えるとともに、その属性や状態を形成する原理」とアリストテレスは言う。この「質料としての原理」とか「属性や状態を形成する原理」（形相原理）という言い方は、アリストテレス自身の哲学用語のピュタゴラス学派への例の読み込みである。

2. 数以外のすべてのものは、数の模倣として成る。

- (1) 数以外のすべては数の模倣として成っている。(985b32-33)
- (2) 数以外のすべては数的に表現されうる。(985b31-32)
- (3) 音階の属性や割合（比）は数的に表現されうる。(985b31-32)
- (4) 正義、靈魂、理性、好機等々は数的に表現されうる。(985b29-31)

3. 数の要素が万物の要素である。

- (1) 数の要素が全存在事物の要素である。(986a1-3)
- (2) 数の要素は偶〔無限なもの〕と奇〔限られたもの〕である。(986a17-19)
- (3) 数は一から成る。(986a20-21)
- (4) 一は偶かつ奇である。(986a19-20)

4. 天界全体が数である。

- (1) 天界全体が数である。(986a20-21)
- (2) 天界全体が音階であり数で表現しうる。(986a1-3)

さて、このようにまとめられたピュタゴラス学派の思考の特質において、わ

たしたちの現在の問題関心からして焦点化されなければならないのは、3における「数の要素が万物の要素である」とするピュタゴラス学派の考え方である。その考え方によれば、「数の要素が全存在事物の要素である」が、「数の要素は偶〔無限なもの〕と奇〔限られたもの〕であり」、「数は一から成り」、「一は偶かつ奇である」。したがって、全存在事物は一から成るということになる。この考え方は、アリストテレスが別のところで報告するピュタゴラス学派の「数」についての考え方、すなわち数とは「一によって測られる多」(*πληθος ἐνὶ μετρητόν Met.*, 1057a3) という考え方と整合するものである。ピュタゴラスの徒たちにとっては、一そのものは数ではなく、数が、したがってまた全世界がそれから成るところの「単位」だったわけである。しかし、その単位としての一は、数論の領域と幾何学の領域とでおそらくすでに区別されていた。プロクロスはピュタゴラスの徒が点を “*μόνας προλαβούσα θέσιν*” (位置をもつ一 [単位]) と定義したと言っている (Proclus, p. 95, 21)。点についてのこの定義は、実質的に、アリストテレスが『形而上学』第5巻第6章 (1016b30) において、数論の単位としての一を「位置をもたぬ点」(*στιγμὴ ἄθετος*) とし、他方、幾何学の単位としての点は「位置をもつ一」(*μόνας θέσιν ἔχουσα*) とした場合のそれと異なるものではなかったであろう。しかしその場合の一ないし単位そのものは、「天界全体が数であり」かつ「数で表現しうる」という事態に端的に表されているように、一方ではそれから世界の諸事物が成るところの素材の特質をもち、他方ではそれによって世界の諸事物が測られるところのものであった。つまりその一は、一種の物質的な点ないし粒子のようなものであった。つまり大きさと部分を有するものであった。彼らピュタゴラスの徒は、そういう物質的な点の配置に基づいて、自分たちの数論を展開したのである。初期ピュタゴラス学派の「図形数」についての報告は、その間の事情を説明して余すところがない。重要なのは、こうした数論ないし点存在論が、ことの必然からして、単位と単位を分かちもの — それをピュタゴラス派の人々はコスモロジーの文脈において、コスモスの外側に広がると想定された無限

なアエールの源初的吸引に関連づけて理解したようだが — の存在を容認せざるをえなかったということである。アリストテレスは、『自然学』第4巻第6章(213b22-27)ならびに失われた著作『ピュタゴラス派の哲学』の一断片(Fr. 201Rose = Stob. *Ecl.* I. 18. 1c; Vors. 58B30)において、この事態をそれぞれ次のように説明している。

ところでピュタゴラスの徒も空虚(κενόν)が存在すると主張して、こう言った。すなわち、それが無限な氣息から(ἐκ τοῦ ἀπείρου πνεύματος)この天界に、空虚を吸い込む(ἀναπνέοντι)ように入りこむ、そしてこの空虚がものの自然をいろいろに区別する(διορίζει), あたかも空虚が継続的なものを分離させ、区別するものであるかのように。そしてこの区別の働きは第一に数のうちに現れる、というのは、空虚がそれぞれの数の本性(τῇ φύσει)を区別するからである、と。

天界は一なるものであるが、無限なものから(ἐκ τοῦ ἀπείρου), 時(χρόνον), 息(πνοήν), 空虚(κενόν)を吸引し、これが、それぞれのものの場を永遠に区別する。

「無限な氣息からの空虚の吸引」という素朴かつ原始的な胎生学的観念は、その起源が前6世紀のアナクシマンドロスやアナクシメネスのアルカイックな気圏に求められうるものであることを示唆しているが、この点に関するカーク・レイブン・スコフィールド『ソクラテス以前の哲学』(G. S. Kirk, J. E. Raven and Schofield, *The Presocratic Philosophers*, Second Edition, 1983, p. 341)の判断は、それが前5世紀に属するというものであった。その根拠は、ここに出てくる「空虚」(κενόν)の観念が、たぶんはエレア学派の創出によるものであろうという推測にあった。

しかし、この件に関する C. Hカーンの判断はおのずから異なる。「プラ

トン以前のピュタゴラス派の哲学」(Kahn, C. H., "Pythagorean Philosophy before Plato", in Mourelatos, A. P. D. (ed.), *The Pre-Socratics*, Garden City, N. Y., 1974., pp. 161-185) において、カーンは大略次のように主張した。すなわち、ここでアリストテレスが言及しているピュタゴラスの徒が、「空気」と「空虚」を区別することが出来ないでいるという事実は、もしこの点に関するアリストテレスの発言が正しいとするなら、重要なものとなる。空気のもつ物質的性質は、どう遅く見積もっても前5世紀中葉にはアナクサゴラスとエムペドクレスによって確証されてしまっていた。しかし、それよりもっと示唆的なのは、無限のプネウマ（氣息）を吸引する「一」の観念である。このこととの関連において、クセノファネスが自分の神について、「全体として見、全体として聞き、呼吸（anapnein）しない。すべてがヌースでありフロネーシスである」と言ったとする学説誌（Diogenes Laertius IX. 19 = DK21A1）が残されている。ディオゲネスによるこの伝承は、現存クセノファネス断片（B23-24）にぴったり合うパラフレーズだが、「呼吸（anapnein）しない」という言葉だけは残存断片に見出されない。しかしそれは、現存断片から失われてしまってわれわれには伝わっていない一部の韻文のパラフレーズでなかったとすると、いったい何なのか。実に了解しがたいこととなろう。だから、それは元々、クセノファネスの言葉だったとしなければならない。では、その言葉によってクセノファネスは何を言おうとしたのか。氣息（プネウマ）を吸引することによって発展するコスミックな一についてのピュタゴラス的な見解を否定することだったのではないか。事態がもしそういうことだったのだとすると、クセノファネスの年代からして、その否定の対象となったのはピュタゴラス自身の考えだったに違いない、と。

カーンの推測は十分に強力である。スコフィールドは「空虚」（κενόν）という概念が、たぶんはエレア学派に由来するもので、古ピュタゴラス学派の関知するはずのなかったものだということを根拠にしてカーンの所説を批判したが、当の概念を使ってピュタゴラス学派について解説しているのはア

リストテレスであることを忘れてはなるまい。アリストテレスの発言は、「空虚」が存在するか否か、存在するとすれば、どのように存在するか、その本性は何であるかを一般的に考察する文脈内でのものである。すなわちその議論は、アリストテレスによる「空虚」概念をめぐる問題設定の一般的枠組みによって規定されたものなのである。古ピュタゴラスの徒たち自身が「空虚」という言葉を使ったかどうかについては、アリストテレスは何も言ってはいない。さらに、パルメニデス自身は残存断片のなかで「空虚」(κενρόν)という言葉は一切使っていないことも、スコフィールドの「エレア学派云々」ということについての推測を根拠薄弱なものとする。パルメニデスが実質的に「空虚」に相当するものを言い当てていたとすれば、それは「あらぬもの」なる概念の射程内においてであったろう。

さて、以上の考察によって明らかになったのは、「継続的なものを分離させ、区別するもの」「数の本性を区別する」ものとしての「氣息」ないし「空虚」の概念が、優に前6世紀の、ピュタゴラス自身の活躍した時代にまで溯りうるということである。そして、事態がそういうことであったのだとすると、パルメニデスがこれを批判したとしても、時代的にも内容的にも少しも不自然ではないということになる。パルメニデスの『ペリ・フュセオース』の著作時代を確定することは困難だが、それを前480年頃を溯って設定するのは無理である。前480年頃といえば、ピュタゴラス没年後10年ほどのこととなろう。そしてそのときゼノンは未だ10歳ほどで、イオニアの地のヘラクレイトスは、その最晩年にあったはずだ。

さて、パルメニデスの論点は、その場合、単位を分かつものとしての空虚ないし空氣が何で何処にあるのかということであっただろう。単位はある。では、単位と単位を分かつもの、つまり単位であらぬ空虚のアイデンティティーは何であるのかが問われたであろう。「あらぬ」ものは、とパルメニデスは言ったであろう、「ありえないではないか。あらぬもの、それは、あるに對立しようがないではないか、というのもあるもののみがあるものに對立するのだから」、と。ピュタゴラス学派の多元論に対するパルメニデスの批判

はこの一点、すなわちピュタゴラス学派が対立的な二原理、「ある」と「あらぬ」を同時に容認し、そのことによって“ $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ ”を分割可能とした点に向けられたであろう。

パルメニデス断片 8, 22-25 行は、パルメニデスがピュタゴラス学派を批判した根本前提が、いま述べたこと、すなわち“ $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ ”（有るもの）に対立するいかなるものも存在しないこと、換言すれば、“ $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ ”がそれ自身に“ $\acute{o}\muο\iota\acute{o}\nu$ ”であり“ $\xi\upsilon\nu\epsilon\chi\acute{\epsilon}\varsigma$ ”であるということに置かれていたことを余さず伝えている。

οὐδὲ διαιρετόν ἐστιν, ἐπεὶ πᾶν ἔστιν ὁμοῖον
οὐδέ τι τῇ μᾶλλον, τό κεν εἴργοι μιν συνέχεσθαι,
οὐδέ τι χειρότερον, πᾶν δ' ἔμπλεόν ἐστιν ἐόντος.
τῶι ξυνεχῆς πᾶν ἐστιν· ἐὼν γὰρ ἐόντι πελάζει.

それはまた、分割可能でない。全体として、一様であるゆえ。それにはみずからの結合を妨げるであろう、より強大なものもより劣弱なものもなく、全体として《ある》で満たされ、全体として連続している。《有》は《有》に密接するゆえ。

この断片 8, 22-25 行は、難解をもって鳴るパルメニデス断片のなかでも、ひととき手強いものである。私見によれば、当該箇所筋のとおった解釈を与えた者は絶無である。解釈を阻む最強の壁は、“οὐδὲ τι τῇ μᾶλλον, τό κεν εἴργοι μιν συνέχεσθαι, οὐδὲ τι χειρότερον”という謎めいた詩句である。

だがこの壁は、“…… μᾶλλον …… χειρότερον ……”という言葉によってパルメニデスが伝えようとしているものを、プラトン『フィレボス』篇 23C-26B に出てくる“ $\tau\acute{o} \acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$ ”に関連づけ、さらにそれを、古ピュタゴラス学派の「無限」に溯源させることによって乗り越えられうる、とわたしは信ずる。

『フィレボス』篇当該箇所において、プラトンは、宇宙全体を四つの原理、すなわち (1) $\tau\acute{o} \acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$, (2) $\tau\acute{o} \pi\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$, (3) 前二者の混合体 ($\mu\iota\kappa\tau\acute{o}\nu$), (4) 混合の原因を設定することによって説明しようとした。ところでこのうちの第一のもの、“ $\tau\acute{o} \acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$ ” についてプラトンは、それが “ $\tau\acute{o} \mu\alpha\lambda\lambda\omicron\nu \tau\epsilon \kappa\alpha\iota \tilde{\eta} \tau\tau\omicron\nu$ ” (より大とより小) や “ $\sigma\phi\acute{o}\delta\rho\alpha \kappa\alpha\iota \acute{\eta}\rho\acute{\epsilon}\mu\alpha$ ” (激しくと微弱に) 等を許容するすべてのものの原理であると言っている。つまりこの無限なるものには、なにか逆方向への進行性のようなものが備わっていて、物事の終結を許さないのだと言う。ところで『フィレボス』篇におけるこの “ $\acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$ ” (無限)こそ、アリストテレスがプラトンの「不文の教説」としての「不定の二」($\acute{\alpha}\acute{o}\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma \delta\upsilon\acute{\alpha}\varsigma$) や「大と小」($\tau\acute{o} \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha \kappa\alpha\iota \tau\acute{o} \mu\iota\kappa\rho\acute{o}\nu$) に関連づけてプラトン最晩年の哲学について語ったところのものであった (『自然学』209b14, 35, 『形而上学』第1巻第6章 987b20)。そしてこの「大と小」は、シンプリキオスがヘルモドロスから引用しているところ (*Phys.* 247. 30-248z15) によれば、二つの両極端、大と小、長と短、広と狭、等々のあいだにあって絶えず振動し、そのうちにいかなる終結要因をももたない原理としての「無限」($\acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$) に関連づけられる。しかしプラトンはこの “ $\acute{\alpha}\pi\epsilon\iota\rho\omicron\nu$ ” を、ピュタゴラス学派とは独立に案出したのではなさそうに思われる。なるほど、「大と小」($\tau\acute{o} \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha \kappa\alpha\iota \tau\acute{o} \mu\iota\kappa\rho\acute{o}\nu$) という名称に関しては、アリストテレスによる

……………彼もピュタゴラスの徒とほとんど同様であったし、また数を他のすべてにとってその実体の原因であるとした点でも同様であった。ただし、彼らが無限なものを \llcorner 一 \lrcorner であるとしたのに反し、彼は \llcorner 二 \lrcorner を立てて、無限なものはこの \llcorner 大と小 \lrcorner から成るとした。この点は彼独特である。(『形而上学』第1巻第6章987b20)

という発言があって、その名称自体はプラトン自身が作りだしたものであっ

たかかもしれないが、名称の背後に控える「無限なもの」に関わる観念そのものは、古く初期ピュタゴラスの徒たち、さらにはピュタゴラス自身にまで溯るものであるように思われる。しかも、「不定の二」という概念自体については、リュケイオン第二代学頭となったテオフラストスによる次のような発言があって、それがピュタゴラス学派とプラトンに共通のものであったことが述べられているのである。

プラトンとピュタゴラス派の人たちは、……不定の二と一とのあいだに或る種の対立を認め、無規定で無秩序なものはいっさいの無形性そのものも含めて、必然的に不定の二という原理に依存しているので、この原理なしに宇宙全体の本性を説明することは彼らにとってまったくの不可能事となった。(11a27-b1)

プラトン哲学がピュタゴラス学派の重大な影響下に成立したものであることは周知のところである。プラトンとイタリアのピュタゴラス派の人々との親交は、ソクラテス没後におけるプラトンのイタリア旅行以来のものである。ピュタゴラス派の「アルケー」としての「無限」がアカデメイアの人々の共有財産となったとしても、特別に奇異なことではなかったであろう。そしてその「無限」は、アリストテレスが、『形而上学』における有名なピュタゴラス学派の「対立物双欄表」の紹介文のなかで、「同じ学派の他の人々は……」と、その主唱者たちが、同じピュタゴラス学派の徒ではあっても、例の「数を原理であると考え、……数の構成要素は偶と奇であり、後者は限られたものであり前者は無限なものである」と考えた人々とは違った者たちであったことを示唆しながら、その第一番目に掲げたところの当のものでもあった(『形而上学』第1巻第5章, 986a23-26)。

限定 (πέρας)	—	(ἄπειρον) 無限
奇 (数) (περιττόν)	—	(ἄρτιον) 偶 (数)

— (ἕν)	—	(πλῆθος) 多
右 (δεξιόν)	—	(ἀριστερόν) 左
男 (ἄρρεν)	—	(θῆλυ) 女
静止 (ἡρεμοῦν)	—	(κινούμενον) 運動
直 (εὐθύ)	—	(καμπύλον) 曲
光 (φῶς)	—	(σκότος) 闇
善 (ἀγαθόν)	—	(κακόν) 悪
方 (τετράγωνον)	—	(ἑτερομήκης) 矩

この対立表は一種のカテゴリー表であって、向かって左側には価値的に優れたものが、右側には劣ったものが配列され、同一行の二つは相互に対立しあう関係にあり、左側ないし右側同士は類似関係にあり、異なった欄を占める任意のもの同士は対立ないしは非類似の関係にある。この対立表がピョタゴラス学派の誰によって、いつ、提出されたものであるかを絶対的な仕方で確定することはできない。しかしこれが、きわめて古い時代のものであることはほぼ間違いない。フィリップはそのピュタゴラス研究 (Philip, J. A., *Pythagoras and Early Pythagoreanism*, University of Toronto Press, 1966) のなかでアリストテレスのピュタゴラス学派の対立物双欄表への言及を分析し、それが実際には 986a15-21 と 986a22-26 の二段に分かれ、986a15-21 では「偶 (数)」・「奇 (数)」がそれぞれに「限定されるもの」と「限定するもの」のいわば種概念をなすものとして規定されて、「一」(τό ἕν) はこの両者 (つまり奇数かつ偶数) で、「数」(ἀριθμός) は「一」から出てくると言われていることを根拠に、986a15-21 のほうがいっそう古い層に属し、986a23-26 のほうは、前者が発展拡大したものであるという解釈を与えた。そのうえで、

限定	—	無限
奇数	—	偶数
	—	

という基本セットが、最も初期のピュタゴラス学派の対立表の原型をなすものであって、この基本的セットに関して言えば、ピュタゴラス自身にまで溯りうる、と示唆した。

ところで、このフィリップの判断は、アリストテレス自身の言葉によっても確証されうるように思われる。というのは、例の対立物双欄表を掲げたそのすぐ後で、彼は「これと同じようなことをクロトンのアルクマイオンも考えていたようであるが、それは、彼が彼らからこの説を受けとったのか、あるいは彼らが彼からであるかのどちらかだろう云々」と言っているからである。アルクマイオンは、アリストテレスの証言によると、ピュタゴラスが老境にあったとき若者であった (Iam. V. P. 104)。しかもアルクマイオンはその書物をピュタゴラスの徒であるプロティノス、レオン、バティルロスに当てて書いている (Fr. 1; D. L. 8. 83)。したがって、たぶん、アルクマイオンにおける対立物についての考想は、かなり高い確度をもって、ピュタゴラス在世中のピュタゴラス学派の考想の影響を受けて成ったものと考えてよいことになるであろう。

では、その「限定」「無限」と「偶」「奇」はどのように関連するのか。これについてもアリストテレスがその理由の一端を『自然学』(203a13)において次のように説明している。つまり、「もしグノーモンを1のまわりに置いてゆけば、またこれとは別に〔2のまわりに〕置いてゆけば、そこに生ずるそれぞれの図形は、ある場合にはつねに異なり、ある場合には一つ〔同じ〕である」と。このアリストテレスの発言は分かりにくい、一般に次のように解釈されている。すなわち図 i が示すように、もし1から始めて、そのまわりにグノーモンを置いていくな、そのつど得られる図形は「つねに自己自身に同一」的な図形、すなわち正方形が得られるが、図 ii のように2から始めてその周囲にグノーモンを置いていくな、そのつど得られる図形は、たえず2辺相互の比を変えていく矩形が得られる、と。

さて、以上に素描してきたような「無限」がピュタゴラス学派の思想の根幹をなすものであったことは、古ピュタゴラス学派の思想の正統的伝承者で

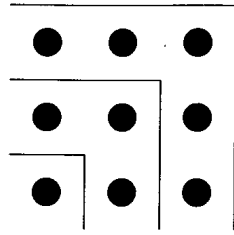


図 i

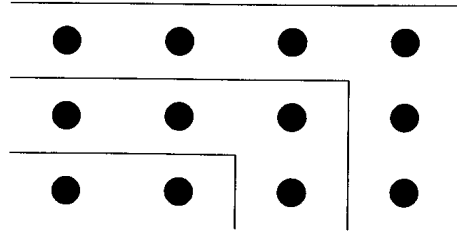


図 ii

あると認められているフィロラオスの断片によっても確認することができる。フィロラオス断片 1, 2, 3 は, 「限定者」(περαίνοντα) と「無限」(ἄπειρα) がコスモス内の一切の事物の原因であると述べるが, 第 3 断片を見ると, コスモス内の一切の事物のうち「限定者」からは限定が, 「限定者」と「無限」からは限定と限りのないものが, 「無限」からは無限なものどもが生ずるということが言われている。謎めいた表現だが, その「無限」の働きが, 数や時空や物的なものの生成に関わるものだったことだけは間違いない。この点についてはテオフラストスも, 一と不定の二を立てた人々が, それらの原理から「数と平面と立体を産出させて」(τοὺς γὰρ ἀριθμοὺς γεννήσαντες καὶ τὰ ἐπίπεδα καὶ τὰ σώματα) 云々と語っている(『形而上学』6a25-26)。

さて, 最初に帰ってパルメニデスの表現 “…… μάλλον …… χειρότερον ……” の意味するところを, 古ピュタゴラス学派の「無限」概念の射程内に置いてみよう。そうすれば, 断片 8, 22-25 においてパルメニデスが拒否しようとしているものがピュタゴラス学派の「無限」であったことが明白となる。ピュタゴラス学派やプラトンのいう「無限」を近代人の「無限」概念と同一視することは無用の混乱を引き起こす。彼らにとってそれは, ≪差異化原理≫とでも言うべきものであった。すなわちこれと交わることによって≪一≫は多化され, その結果, 数が生まれ, 線が生まれ, 面が生まれ, こうして物的なものどもから成る世界が生ずる, と理解されたのである。

「無限」原理を立てることなしには、テオフラストスの言うとおりに、「宇宙全体の本性を説明することは彼ら〔ピュタゴラスの徒〕にとってまったくの不可能事」だったのである。しかしまさにこの文脈において、パルメニデスは次のように異議を唱えるであろう。

「よろしい。しかし、“τὸ ἐόν” に、いったい何物が対立しえよう？
 ≪あるもの≫に対立するもの、それは≪あらぬもの≫でしかありえないではないか。しかし≪あらぬもの≫は、それを考えることも言表することもできない（断片3参照）。あらぬものはあくまであらぬ（断片2，3行参照）。したがって“τὸ ἐόν” に対立してこれを相対化し、そのことによって“τὸ ἐόν” を差異化するいかなるものも存在しない。“τὸ ἐόν” は全体として自己みずからに“ὁμοῖον” だからである（断片8，22行）。すなわち、それは一切の差異を含んでおらない。したがってそれは、一切の動揺・一切の散乱を超越して、自己自身と固く結ばれている（συνέχεσθαι，23行）。それは、自己自身との結びつきを相対化し差異化するところの、より強大なもの（μᾶλλον）や劣弱なもの（χειρότερον）との一切の関係を超越している。自己に対立して自己内に差異を生じさせるところの、どのような契機をもそれは孕んではない。 “τὸ ἐόν” が “ὁμοῖον” であるとは、このことである。だからこそ、“τὸ ἐόν” は、≪ある≫で充ち充ちているのである（24行）。つまり、≪ある≫に近接するものなど一切あらぬのである。にもかかわらず人あって、敢えてなおも「近接する」ものありと言うならば、それは自己自身に近接している（『≪有≫は≪有≫に密接する』）のである。だからこそそれは、全面的に、自己自身と合体・連続（ἑννεχές）しているのである（25行）」
 と。

さて、パルメニデスに託してしま語ったことを、断片8，22-25行に即していっそう具体的に説明するため、“τὸ ἐόν” を “μᾶλλον……χειρότερον” という不等な「力」の場に位置づける一つの思考実験をやっ

みよう。その思考実験を思いつくや否やただちに分かることは、そういった思考実験が“ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ”に自己矛盾を強いるということである。“ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ”をそれよりも強大なもの（ $\mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu$ ）やそれよりも劣弱なもの（ $\chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ ）に対置するということは、それを次のような不等式のなかに封じこめるというに等しいからである。すなわち、

$$(1) \mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu > \tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu > \chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$$

である。ところで、この不等式は当然、

$$(2) \mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu > \tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$$

$$(3) \tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu > \chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$$

という二つの不等式を合わせたものである。さて、これらの不等式が含意するところを考えてみたい。(2)の場合には、

(2) “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ”は自己自身より強大なもの（ $\mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu$ ）との関係において、いっそう劣弱（ $\chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ ）である。

という命題が得られ、(3)の場合には、

(3) “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ”は、自己自身より劣弱（ $\chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ ）であるものとの関係において、いっそう強大（ $\mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu$ ）である。

という命題が得られる。したがって、これら二つの命題を合わせたものが意味するところは、

(1) “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ”は、より強大なもの及びより劣弱なものとの関係に

において、より強大 ($\mu\tilde{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu$) かつより劣弱 ($\chi\epsilon\iota\rho\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$) である。

というものであろう。つまり “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” に対して、相矛盾する二つの述語が付け加えられるわけである。そしてそれら二つの述語は、互いに相反する逆向きのベクトルをもって “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” を引っ張り合うわけだ。その結果は、“ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” の自己同一性が二つに引き裂かれるということになる。これがすなわち “ $\tau\acute{o} \kappa\epsilon\nu \epsilon\acute{\iota}\rho\gamma\omicron\iota \mu\iota\nu \sigma\upsilon\nu\acute{\epsilon}\chi\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ ” (みずからの結合を妨げるであろう) という言葉の意味するところである。

しかし “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” がそのような「逆向きの道」($\pi\alpha\lambda\acute{\iota}\nu\tau\rho\omicron\pi\acute{o}\varsigma \kappa\acute{\epsilon}\lambda\epsilon\upsilon\theta\omicron\varsigma$ 断片 6, 9 行参照) を、「二つ頭ども」($\delta\acute{\iota}\kappa\rho\alpha\omicron\iota$) のように彷徨することはありえない (断片 6, 5 行)。そう考えること自体が “ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” の概念に矛盾する、とパルメニデスは言う。何故なら、(1) が意味するところは、

“ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” は、より強大なもの及びより劣弱なものの双方との関係において、より強大であり・かつ・あらぬし、より劣弱であり・かつ・あらぬ。

であるだろうが、この命題の含む「あり・かつ・あらぬ」は背理であって廃棄されねばならぬゆえに、“ $\tau\hat{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ ” は、自己同一性のうちにとどまらねばならないからである。

こうして、「無限」概念を中心とする初期ピュタゴラス学派に対するパルメニデスの攻撃は、彼らのコスモロジーや数理哲学の基幹部を襲い、《多》の立脚する余地を根底から破壊するものであった。ピュタゴラス学派の人々は、その攻撃に耐えてなおも《多》を擁護しつづけるためには、新たな理論を構築しなければならなかった。しかしながら彼らは、父祖伝来の「無限」概念を捨てるわけにはいかなかった。それを捨て去ることは《差異化原理》

を、したがって《多》を放擲すること、したがってまた、自分たちの多元論的世界観に見切りをつけてパルメニデスの軍門に下ることを意味したからである。彼らはしかしパルメニデスの徒になりえなかった。彼らは「狂気の沙汰」(アリストテレス『生成消滅論』第一卷第八章324a)としか思われぬ考え方をするエレアの連中に比べると、ある意味でずっと常識人に近い人々であった。物が多に分かれて存在し、運動や変化が行われている世界、その実在性を、彼らは毫も疑わなかった。その信念を救済するために彼らのなしたことは、表面的には、パルメニデスの攻撃によって綻びをみせた自分たちの理論に、必要と思われるいささかの修繕を加えただけのことであった。つまり彼らは、パルメニデスの批判に持ちこたえられるように、「単位」についての自分たちの考え方を洗練させたのである。この必要事を満たすために彼らが着目したのは、「《有》は《有》に密接するゆえ」(ἐὸν γὰρ ἐόντι πελάζει)というパルメニデスの言葉であった、と思われる。

だが、そのようにして実現した彼らの数理哲学の実質は、事実問題として、人類の思考の歴史に一大エポックを画するものであった。そしてその一部分こそが、この章の冒頭において定式化したところの、ゼノンの論敵たる多元論者たち(すなわちピュタゴラス学派第二世代)の「点存在論」だったのである。

1993・6・14

共同研究プロジェクト「ことばと論理」「同(Ⅱ)」
総合研究所会議室にて

追記 本研究は、日本私学振興財団の平成4年度および5年度の学術研究振興資金を得て行なわれた研究の一部である。

Zeno of Elea—His Argument against Plurality (I)

Hideya Yamakawa

According to Plato's description in his *Parmenides* 128A-D Zeno wrote his treatise in order to come to the support of his teacher Parmenides' doctrine "ἐν τὸ πᾶν", while in Parmenides' preserved verbatim fragments we see his main doctrine was "there is nothing but the ὄν". "In this respect then Plato's report appears to be 'out of focus'" (Kurt von Fritz, "Zeno von Elea in Plato's *Parmenides*"). In any way, however, it is unquestionable that Zeno's treatises were exclusively designed to refute the existence of many things (πολλὰ) and focused on the problem of the homogeneity and indivisibility of the continuum. So Parmenides said in his fragment B8,22-25:

οὐδὲ διαίρετόν ἐστιν, ἐπεὶ πᾶν ἐστὶν ὁμοῖον...
τῷ ξυνεχὲς πᾶν ἐστὶν.

Zeno's argumentations against plurality intended to preserve Parmenides' doctrine about the homogeneity and the indivisibility of the ὄν and his attacks against the motion reported in Aristotle's *Physica* Z,9 were the applications of his analysis of the plurality to the continuum: space, time and mass. My paper presents a full analysis of Zeno's argumentations against plurality reported in Simplicius' commentary 139-27 and tries to identify the theory against which Zeno struggled and his enemies with whom he fought.